独立行政法人 国立病院機構
四国こどもとおとなの医療センター

アートプロジェクト

ー今月のショットー

ローラーの練習をする養護学校の生徒たち

壁画本番！

2015年　9月号

ー院内の小さな声からー

それがあさぎまだらという名前の蝶だったと画家の増田妃早子さんが見せてくださった画像ではじめて知りました。繊細な模様の軽やかな羽で、海を渡り何千キロもの旅をするブルーグレイの蝶。その蝶と私が初めて出会ったのは徳島県の霊峰つるぎ山の頂上でした。透き通るような羽を持ったその蝶は大きな青い石の上ですでに力尽きていました。横たわるその羽根と、光に反射する青い石の境目が見当たらなくて、まるでその石に溶け込んでゆくようで、思わずシャッターをきったのでした。10年ぶりの再会でした。増田さんは言いました。「蝶って少しの風にも影響されるでしょう。雨に打たれたらすごいダメージだと思うんですよ。それなのに、海を渡るって。びっくりして。。。」繊細だけど強い。それは増田さんの描く抽象画から私が受けるイメージそのものでした。そして、これまで私が接してきた養護学校の学生たちもまた、傷つきやすく繊細な心の中に芯の強さを持っていました。増田さんはあさぎまだらという蝶に、学生たちへのエールを込めたのだと気づきました。

ー海を渡る蝶ー

旧養護学校図書室の壁に描かれていた群蝶図を、病院と学校の間の壁に描こうと、数年前から計画を進めていました。卒業する生徒たちが自分たちの蝶を描いて、毎年蝶の数が増えてゆく、成長する壁画ができたら素敵だね。と。当院と隣接する養護学校はこれまで「医教連携」を理念に掲げ病院とタッグを組んで病める子どもたちのサポートを続けてきました。9月、養護学校と病院、NPO アーツプロジェクトの協力により計画が実現されることになりました。画家の増田妃早子さんに相談し、現在描かれている外壁と調和したテイストの蝶の描き方を考えました。誰でも楽しみながら参加できるように。増田さんが考案したのはローラーとマスキングテープを使った描き方でした。いきなり本番では学生たちも戸惑うだろうと、練習をすることにしました。前もって先生方にお伝えし、アドバイスをいただきながら授業として取り組みます。大きな画用紙を床に敷いてグループに分かれてローラーを走らせる練習をするのですが、はじめはなかなか自分の前にある画用紙から隣の学生の前の画用紙までのびやかな線を描くことができません。「あさぎまだら（蝶）が海を越えて大陸まで飛んで行くルートをイメージして」増田さんが励ます。その声である生徒が思い切って大きく腕を伸ばしました。そこに力強い水色の道ができました。「そう！そんな感じに。」その学生は何かが吹っ切れたように、自由なラインを描き始めました。他の学生たちも続きます。学生たちが楽しそうに動き始めると、その分だけ線が増え画用紙には美しい像が浮かび上がります。賑やかな声が体育館に響きます。気持ちと身体と表現はつながってるんだなあ。と見ていました。練習の甲斐があって、チーム間のコミュニケーションが生まれ、本番でも協力し合って無事に美しい壁画が完成しました。それは病院と学校の間に在った「壁」が「壁」ではなくなった瞬間でした。

ー今月の１枚ー

作家名：早渕　太亮

作者が散歩したいと思う風景を描きました。見る方がぼんやりとながめられるように色も線も控えめに描いています。多くの物事には「こうしなければならない」という圧力が少なからず存在していると感じます。少しの間、それらから離れ、ぼんやりする時間をつくりたいと思い、制作しました。